



1

「陽の花 01」 W727xH910

©Akemi Fukuoji, Courtesy of Akio Nagasawa Gallery

福王寺朱美 「FUTURE ZEN」

この度、Akio Nagasawa Gallery Ginzaでは、福王寺朱美個展「FUTURE ZEN」を開催いたします。福王寺朱美は、1955年東京生まれのアーティストで、宝石や水晶、鉱物を軸に創作を行っています。本展では、2021年に発表された「FUTURE ZEN」シリーズより、ペインティングと立体作品を展示いたします。複雑化する社会や加速度的に膨張する情報の渦中で、人々が見失いがちな自己の内奥に息づく静けさへとまなざしを向ける本シリーズについて、作家は「鑑賞者がその内なる平穏に触れ、自らの存在の根に立ち返ることで目醒め、それぞれの未来が輝いてゆく契機となることを願っている」と語ります。

立体と平面、両面から展開されるそのビジョンが示す、作家ならではの“禅”のかたちを、ぜひこの機会にご高覧ください。

《開催概要》

作家名	福王寺朱美
タイトル	「FUTURE ZEN」
会期	2025年6月6日（金）－6月28日（土） 火曜～土曜 11:00-19:00（土曜 13:00-14:00 CLOSED） 休廊日：日曜、月曜、祝日
会場	Akio Nagasawa Gallery Ginza 〒104-0061 東京都中央区銀座4-9-5 銀昭ビル6F TEL：03-6264-3670
公式ページ	https://www.akionagasawa.com/exhibition/future-zen/

※ギャラリーのスペースの関係上、祝い花については謹んでご辞退申し上げます。

《作家ステートメント》

FUTURE ZEN

現代の世界では、紛争や対立が絶えず、国際情勢の緊張が高まっています。加えて、情報が瞬時に行き交い、急速な変化が求められる環境の中で、多くの人々は過剰なストレスや不安を抱え、心の平穏を見失いやすくなっています。グローバルな課題や技術革新がもたらす利便性の背後で、多くの人々は自身と向き合う時間を奪われ、内なる静寂を求める声が高まっています。

こうした時代の流れを背景に、FUTURE ZENは、人々の心に平和と安らぎをもたらすことをテーマに掲げています。宗教や文化の境界を超えた自由と慈愛に満ちた世界観を探求し、瞑想の瞬間に得られる精神融合をひかり色を通じて表現しました。

私は、限りなく純粋な宇宙の本質的な美を敬い、その真髄を追求することをライフワークとしています。この探求を通じて、私自身の気づきが他者の気づきと響き合い、新たな心の対話を生み出すことを心から願っています。



2

「レムリアの釈迦マリア」 W250xD180×H645
©Akemi Fukuoji, Courtesy of Akio Nagasawa Gallery

《作家略歴》



福王寺朱美 Akemi Fukuoji

1955年東京生まれ。

宝石商の父の遺志を継ぎ、ロサンゼルスにてGIA 宝石鑑別士、ダイヤモンド鑑定士の資格を取得。1980年から宝石鑑定士をしながら、日本画家の福王寺一彦氏のアシスタントとして美術界にかかわる。1997年ジュエリーブランド「AHKAH」を創業。

2018年AHKAHをTASAKIグループ入りさせて美術家としての創作活動に入る。

2021年FUTURE ZEN第1弾の作品を発表する。

長年にわたり身近に触れてきた宝石、水晶や鉱物を軸に、立体作品や絵画を制作している。

■ オフィシャルサイト <https://akemifukuoji.com>

■ Instagram <https://www.instagram.com/akemifukuoji/>

《広報・ご取材に関するお問い合わせ》

AKIO NAGASAWA Gallery | Publishing (担当：後藤) goto@akionagasawa.com

《広報用画像》

ご希望の画像番号をお申し付けください。

画像クレジット ©Akemi Fukuoji, Courtesy of Akio Nagasawa Gallery



3

「しゃぼん玉 06」 W297×H420



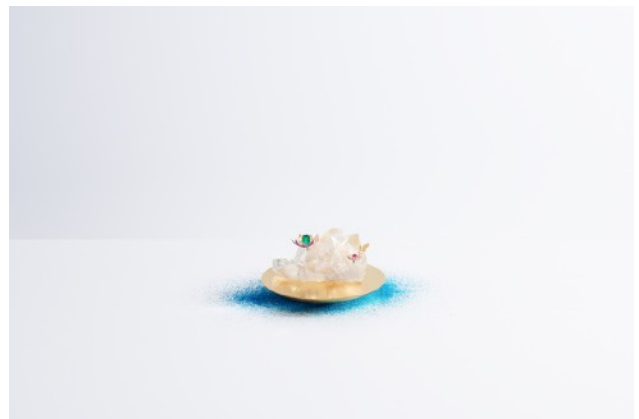
4

「micro cosmos 01」 W210×H297



5

「miss ruby」 φ85×H125



6

「神花」 φ78×H47

《参考文献》

ここに光ありーすべての祈りを引き受ける、福王寺朱美の創造物

宮津大輔 (横浜美術大学教授、森美術館理事、美術評論家、アート・コレクター [Art Basel Global Patrons Council メンバー])

ジュエラーを営む家に生まれた福王寺朱美は、朴訥な原石のどこに、煌びやかな光源が潜んでいるのか探り当て、カット、研磨する職人達と共に仕事をする両親の姿と接しながら、多感な少女時代を過ごした。

20代で若き日本画の俊英に嫁いだ彼女は、親子鷹の如く画布に向かう父親のために日々絵具を溶き、大小様々な筆を整えていた。日本画で使う顔料の多くは鉱物を微細粒子にしたものであり、彼らが得意とした「月光に照らされる幻想的な森」にはマラカイト(孔雀石)の「松葉緑青」が、そして「雄大なヒマラヤ連峰」にはラピスラズリによる「瑠璃」や、アズライト(藍銅鉱)由来の「群青」が欠かせなかった。彼女は絵具を練り上げる指先を通じて、刻々と変化する天候や気温を計り、貴石や宝石と身体的な会話を重ねながら、顔料や膠、そして水の塩梅を見定めていたという。

その後、大きな離別を機に意を決した福王寺は、自らの名を冠したジュエリー・ブランド「AHKAH」を立ち上げる。「世代を超え、国境を超え、時代を超えてもなお、美しいものとして永遠に愛されていくジュエリーを作り続ける」という理念を掲げた同ブランドのジュエリーは、瞬く間に本物志向を有する女性達の心を虜にした。そして、男女雇用機会均等法改正や育児・介護休業法の施行などを背景とした、女性の社会進出と歩調を合わせるように、AHKAHのビジネスも拡大の一途を辿っていったのである。

肌馴染みの良いゴールドに、隙間なくダイヤモンドを埋め込んだ「パヴェダイヤ・シリーズ」は、指先や首元で小さな銀河の如く煌めき、自立した女性達を華やかに彩る。優美な中にもしなやかな強さを秘めた女神ヘーラーのように、それらは身に着けた人を守り、自信を与える特別な存在となっていく。福王寺が手掛けたジュエリー・デザインは、造形美の追求のみならず、すべての女性を輝かせたいと願う、彼女自身の堅固な意志を形象・結晶化したものであった。

ジュエリー・ビジネスから身を引いた福王寺が、次に挑戦したのは宝石や鉱物を用いて「すべての祈りを引き受ける存在」を創造することであった。2021年6月に彼女は「Future Zen(未来の禅)」展で、その成果を初めて世に問うている。「禅というと宗教的だと思われるかもしれないが、『未来の禅』とは、宗教や国境がない解放された世界のこと。苦しかったときに座禅に行ったことがある。毎日瞑想し、辿り着いたのが平和な心だった」※1 と彼女はその真意を述べている。展覧会に訪れた人々は、それらを「アート作品」、「工芸」あるいは「未来の仏壇」などと思いの言葉で表現していた。

現在、日本は尖閣諸島と竹島、そして北方領土返還という領土に付随する問題を抱え、また、世界へと目を転じれば、領土や宗教、民族問題が複雑に絡み合ったロシアによるウクライナへの軍事侵攻やガザ紛争など、国際情勢はますます混迷の度合いを深めている。特定の宗教や国家あるいは国体に帰属しない、多種多様な人々の祈りを引き受ける対象(物)こそ、VUCA※2 な現代社会において私たちが切望する厳存であるといえまいか。

さて、モダニズムを牽引した評論家であるクレメント・グリーンバーグ(Clement Greenberg, 1909~94年)は、絵画における「純粋性=平面性=三次元イリュージョンの排除」※3 を説き、同時代に活躍したハロルド・ローゼンバーグ(Harold Rosenberg, 1906~78年)は、「アクション・ペインティング」※4 において「カンヴァスが、実際のあるいは想像上の対象を再生し再現し分析し、あるいは"表現する"空間であるよりむしろ、行為する場としての闘技場に見えはじめた」※5 と唱えたのである。福王寺の「すべての祈りを引き受ける存在」が仮にアート作品であるとするならば、日本画家と二人三脚で作品制作に携わった彼女は、「すべての祈りを引き受ける存在」という作品により美術史を平面の純粋性から解放し、立体/彫刻へと可逆的に捉え直したと思惟することもできよう。

他方、ハプニングを創始したアラン・カプロー(Allan Kaprow, 1927~2006年)による独自の空間に対する参与=ある種のパフォーマンスは、実験音楽家ジョン・ケージ(John Cage, 1912~92年)を通じて、仏教学者・鈴木大拙(D.T. Suzuki, 1870~1966年)の教えを間接的に受容することで、ジャクソン・ポロック(Jackson Pollock, 1912~56年)の「アクション・ペインティング」と「禅」の双方を取り入れ生み出されたと考えられている※6。こうした先達に鑑み、「祈り」という行為に着眼して福王寺作品を俯瞰すれば、「未来の禅」を顕現するためのアクションあるいはパフォーマンス共鳴増幅装置として領得することも、決して牽強附会とはいえない。彼女は常に美術史というマクロコスモスと、私小説的な宝石を巡る物語としてのミクロコスモスを照応させながら、創作に身を投じてきたのである。

どれほど科学技術が発達したとしても、最適解を求める人工知能に祈りは理解できないであろう。世のあらゆる事象が機械に取って代わられる現在、祈りこそは私たち人間に残された貴重な営為の一つである。ここに光ありー光を宿し、放つ福王寺朱美による創造物は、祈りを通じて「人新世」※7 に謳い上げる高らかな人間賛歌といえよう。

※1：以下より引用。

益成恭子「『アーカー』 創業者の福王寺朱美が宝石や鉱物で描く禅の世界」『WWD JAPAN』

<https://www.wwdjapan.com/articles/1227377>

2025年3月2日閲覧

※2：Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)という4つの言葉の頭文字をとった造語で、社会を巡る環境の複雑性が増大する中で、想定外のことが起きたり、将来の予測が困難だったりする「不確実な状態」を指す。

以下を参考にし、一部を引用。

「用語解説 VUCA」野村総合研究所公式 Web サイト

<https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/luca.html>

2025年3月2日閲覧

※3：以下を参考にし、一部を引用。

Clement Greenberg, "Art and Culture : Critical Essays" Beacon Press, Boston, 1965, pp.208~229

クレメント・グリーンバーグ「『アメリカ型』 絵画」『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄他訳、勁草書房、2005年、111~140ページ

※4：ローゼンバーグは、ジャクソン・ポロック(Jackson Pollock, 1912~56年)らのパフォーマンス的な描画行為を、「アクション・ペインティング」と名付けた。

以下を参考にし、一部引用。

Harold Rosenberg, 'The American action painters', "Art News" vol.51, no.8, Dec. 1952

※5：以下より引用。

ハロルド・ローゼンバーグ「2. アメリカのアクション・ペインターたち」『新しいものの伝統』東野芳明、中屋健一訳、紀伊國屋書店、1965年、23ページ

元典：Harold Rosenberg "The Tradition of The New" Da Capo Press, 1994, pp.25~26

※6：参考

拙著『現代美術史における前衛書のリポジショニング』思文閣出版、2022年、123ページ

尾崎信一郎「革新としてのアクション・ペインティング」『絵画論を超えて』東信堂、1999年、60~61ページ

※7：人類の経済活動や核実験などによる環境変化が、小惑星の衝突や火山の大噴火に匹敵するほど地質学的な変化を地球に刻み込んでいることを表す。

ノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツェン(Paul Jozef Crutzen, 1933~2021年)らが、2000年に提唱。

参考

「地球史に人の時代現る 『人新世』 環境に大きく影響」『日本経済新聞』2023年8月14日

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD318BE0R30C23A7000000/>

2025年3月3日閲覧